



先月号より連載されている**佐藤智充副院長著述の連載(全6回)の第1回目**です。
赤十字の成り立ちから現在まで、これを読めばあなたも赤十字通！！

戦争と災害と赤十字

第1回 アンリ・デュナン

ジャン・アンリ・デュナン (Jean Henri Dunant, 1828年5月8日-1910年10月30日)¹⁾ はスイスのジュネーブに5人兄弟の長男として生まれた。父親は政治・経済界の名士であり、母親も名門家の出身で福祉活動に熱心であった。

1838年(10歳時)にジュネーブの名門校であるカルヴァン学校に入学するも学業不振により3年で退学し家庭教師による補習授業で勉強し、その後慈善団体のメンバーとして働くようになった。

1849年(21歳時)には銀行の正社員として熱心に仕事をこなす傍ら、キリスト教の活動にも尽力した。25歳の時には勤務先の銀行からフランスの植民地であったアルジェリアへの出張を命じられ、そこで差別や貧困、迫害に苦しむ現地の人々に衝撃を受け、翌年に銀行を退職。アルジェリアの人々を助けるためにアルジェリアで農場と製粉会社の事業を始めた。しかし水不足の問題で事業がうまくいかず借金が嵩むこととなった。



1) アンリ・デュナン

その翌年に水利権獲得の請願のためにイタリア統一戦争に介入してオーストリア帝国と戦っていたナポレオン3世に会いに行き、その際に北イタリアでソルフェリーノの戦いに遭遇。この戦いは両軍合わせて20万人を超える軍隊が衝突し、4万人近くの死傷者が出る激戦であった。戦場に放置される死傷者の姿を見て救援活動を行い、これが戦場に於いて敵味方の区別なく負傷者の救護にあたることを目的とする赤十字創設の契機となった。

1862年(34歳時)にその体験を「ソルフェリーノの思い出」として本を出版。ソルフェリーノの丘に群生していたイトスギの木²⁾は現在も赤十字のシンボルツリーとなっており、小野田赤十字病院にもソルフェリーノの丘のイトスギの苗木が植樹されている。



2) 写真：東京新聞
(ソルフェリーノのイトスギの木)



当院のイトスギの木



平成29年3月29日
小野田赤十字病院 イトスギ記念植樹の様子

1863年（35歳時）ジュネーブで国際負傷軍人救護常置委員会（通称5人委員会）が結成され、アンリ・デュナンはその委員に選出されて国際会議の招集のために奔走した。赤十字規約10か条を採択し、各国に戦時救護団体が組織され、国際組織赤十字社の誕生となった。因みに日本政府がジュネーブ条約に加入したのは1886年（明治19年）であり、その翌年の1887年（明治20年）に名称が現在の日本赤十字社となった。

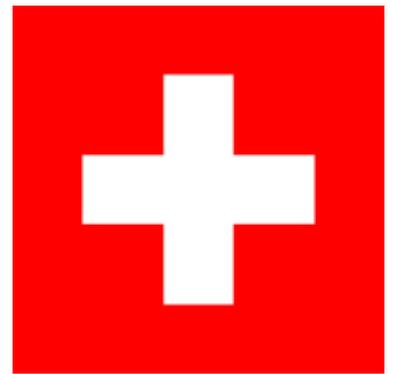
その一方でデュナンは、当時理事を務めていたジュネーブ信託銀行が1865年に倒産したり、アルジェリアでの事業が大打撃を受け、株主らから告訴されるなどして5人委員会から辞職を求められ、1867年にジュネーブを去り、その後約20年に渡り消息を絶った。

その後も長期にわたる貧困生活を送り、教会や友人宅などで下宿生活を送ったとされている。

晩年は自叙伝などの執筆活動を行い、1895年（67歳時）にスイス東部の新聞記者がデュナンを訪ね、デュナンの書いた記事が週刊新聞に掲載されることによって長い間忘れられていたデュナンの功績が再び脚光を浴びることとなった。知り合いであったルドルフ・ミュラーによりノーベル平和賞の選考委員に推薦されたことにより1901年の「第1回ノーベル平和賞」を受賞した。

1910年10月30日に82歳で死去するまで質素な生活を送り、殆ど手付かずであったノーベル賞の賞金はスイスとノルウェーの赤十字社に寄付されることとなった。

また赤十字社のマークはアンリ・デュナンの母国であるスイスの国旗³⁾の赤白の配色を逆にしたものであり、デュナンの誕生日である5月8日は世界赤十字デーとすることが第2次世界大戦後の第20回赤十字社連盟理事会で決定された。以降、同日には世界各国で赤十字に関連するイベントが行われたり、日本においても各地の観光スポットや歴史的建造物が赤くライトアップされているのである。



3) スイスの国旗

第2回は第一次世界大戦についてである。

文責 佐藤智充

～ 筆者プロフィール ～

小野田赤十字病院 副院長 佐藤 智充（さとう とみみつ）



1970年、山口県生まれ
2004年、山口大学大学院先端分子応用医科学講座

診療科：外科
専門医資格等：日本外科学会外科専門医
マンモグラフィ読影認定医
がん治療認定機構がん治療認定医
感染制御医（ICD）
災害医療コーディネーター